

Title	蛇の話
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 1 p.153-p.166
Issue Date	1990-01-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79461">https://hdl.handle.net/11094/79461</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 蛇 の 話

井 本 英 一

日本が高度成長する以前は、蛇は多くの人々にとって身近な存在であった。古い農小屋の板壁を蛇が這っているかと思うと、いつの間にか見えなくなってしまう。おそらく、小屋の中に入ったのであろう。あるいは、壁の根元に沿って地面を這っているが、あっという間に見失ってしまう。道路傍の石積みの際間に入る蛇は、昔から力士でもその尾を引っ張っても出てこないといわれていた。寺島良安『和漢三才図会』巻45の最後の所に、蛇は煙草のやにを嫌うので、蛇が穴に入ったら、やにをつけたら出てくる、といっている。さらにつづけて、補注の形として、その人が左手で自分の耳をつかみ、右手で蛇を引くと蛇が出てくるが、その理由はよく分からない、という。

蛇は人家ばかりでなく、廃趾や墓にも出没するので、世界の人々の間でいろいろな観念や信仰が発達した。樹木の周辺を這っているうちに、急に姿を見失うことがあるが、地下に消えるためであろう。蛇は大地や地下と深い結びつきをもつと考えられたのであろう。足も羽もないのに、すばやい動作で人の前から姿を消すので、その優雅な神秘に満ちた滑らかな動きの中に、人々はある種の怖れと尊敬を感じとったであろう。

蛇の目は瞼がないので動かない。ある種の冷たさがあり、古くから人々の注目をひいたようである。日本では、蛇の目文様として表象される。その起源はそれほど古いものではなさそうであるが、家紋にも採用されるように、別に忌み嫌われるものでもなかったようである。蛇は口を閉じたまま、先端が二股になった長い舌を出し、獲物に対して急激に襲いかかる。このような、静と動の習性は、目の魅力と皮の美しい模様と、場合によっては人を殺す毒と相まって、蛇に独特の地位を与えたようである。

蛇は脱皮して、昆虫と同じようにぬけがらをあとに残す。蛇は昆虫のように、脱皮することによってより大きくなり、成虫に変わるというようなことはないが、かえってそれが蛇の不死性を印象づけたのではないと思われる。温帯では、蛇は冬は土の中で冬眠し、全く元気がないが、春とともに地上に出てくるのは極めて古くから知られていた。地上では、3週間から6週間にいちど脱皮するので(吉野裕子『蛇』法政大学出版局、第1章、1979年)、4月から10月末までに5、6回脱皮を繰り返すことになる。脱皮する直前の蛇の目は、濁って白っぽくなり、体も艶がなくなりカサカサし、動きがにぶくなり、水に入りたがる(吉野、前掲書)。人は、蛇のこのような習性の中に、つねに再生してやまない蛇の不死性を読みとったであろう。蛇の脱いだ皮はもちろん、蛇のいろいろな部分は薬効があると信じられるのも理由のあることである。

人は蛇を薬としてその不死性にあやかろうとし、いっぽう蛇の美しい皮を珍重するが、毒蛇であるしにかかわらず蛇を嫌悪することはなほだしい。これは、爬虫類の全盛時代の哺乳類の悪夢だ、という説がもっともらしいひびきがするが、専門家によるとどうも俗説らしい。宮地伝三郎『十二支動物誌』にいう。ヒトに限らずサルも蛇をこわがる。しかし、おりの中で生まれて育ったサルは蛇を見せられても驚かなかった。ヒトでもサルでも仲間がこわがるのを見習うので、その社会にでき上っている伝統的な見方や考え方に影響されるらしい(82頁)。この本にはもう一つの俗説(私もそう信じていた)の蒙を啓いてくれる。奈良県の大神社では、三輪山伝説の蛇神に鶏卵を供えている。蛇に卵を供える風習や、蛇が卵を盗む習癖がある。この場合、蛇は高い所から落ちて体内の卵を割ると思われている。しかしそれは俗説で、実は卵は第25番目の脊椎の所でつぶされるのである(87頁)。蛇の卵割りとは関係はないが、ベトナム難民は、ポート・ピープルと呼ばれてマレーシアの無人島に収容されるが、赤ん坊の誕生は定住を難しくするので、高い所からわざと飛び降りて、流産する妊婦があとを絶たないという(『毎日グラフ』1988.12.25)。

アイヌ民族に蛇崇拝があったことは示差的である。明治11年、英人イザベラ・バードが米国経由で来日し、日光を旅行して、さらに奥地に入り、最後は北海道のアイヌを訪ねた。その都度、観察した記録を妹に書き送ったが、『日本の未踏の地』(高梨健吉訳『日本奥地紀行』)としてまとめられて出版された(1880年、明治13年)。それによると、アイヌはふしぎに蛇を怖がる。彼らの中でもっとも勇ましい男でも、蛇を見ると逃げる。噛まれたときの治療法を知らないからだ、という人もあるが、それ以上のものがあるに違いない。無害と分かっている蛇を見ても逃げ出すからである、といわれている(321頁)。J. バッチャラー師によると、アイヌは、蛇族の父である神話上の蛇王を崇拝する。蛇は出産のときさまざまな災いをひき起こし、蛇を殺した者にとり憑くことがあるという(『アイヌとその民俗』ロンドン、1901年、356頁以下)。アイヌのこの信仰は、アイヌ固有のもので、彼らの故地からたずさえてきた信仰と考えられる。それは、蛇と死者の靈魂に関する信仰に由来するものであろう。

バードはいう。アイヌは、狼、黒い蛇、フクロウ、その他いくつかの獣や鳥にカモイ(神)という名をつけている。例えば、狼は「吠える神」であり、フクロウは「神々の鳥」、黒い蛇は「大鴉神」である。しかし今ではこれらは全て崇拝されていない。狼崇拝はごく最近なくなった(前掲書、312頁)。アイヌのフクロウに対する崇拝についてバードはこれ以上のことをいっていないが、私が問題にしたいのは、大鴉神である。蛇と大鴉がなぜ同一視されたのであろうか。おそらく、大鴉が人の死体を食うことと関係があるのであろう。大鴉が死体を食うことにより、カラスの中に人の魂も入る。その結果、人は大鴉に変身したのである。それがなぜ、蛇と同一視されたのであろうか。蛇も、これから論ずるように、死者が変身したり、死者の魂が乗り移ったものである。アイヌは土葬するが、極めて古い時代には、イランやインドのゾロアスター教徒や、チベット人のように、死体を大鴉に食わせていたのかも知れない。

仁徳天皇55年、蝦夷が叛いたので、朝廷では田道という者を派遣して討たせた。しかし田道は蝦

夷に敗れて死に、墓に葬られた。そのあと、蝦夷がまた襲ってきて人民を苦しめた。そこで人々は田道の墓を掘った。すると、大蛇が目をついて墓の中から出てきて蝦夷を噛んだので、毒にあたって多くの者が死んだ。時の人は「田道はすでに死んでいるのに、復讐することができた。死人にも意識というものがあるのだ」といった（『日本書紀』）。ここにいう蝦夷とは、アイヌのことであろう。田道は死後大蛇になって墓の中にいたが、掘り起こされてアイヌに復讐したのである。掘った人々は田道がわの者であったことが文の前後から分かる。この背後には、人間は死後、蛇になるという信仰があったと思われる。ことに非業の死を遂げた者が化した蛇は、復讐すると信じられていたらしい。同時代のアイヌにも、同じ信仰があったと考えられるのである。この場合、彼らは大蛇の目にあてられて死んだとある。蛇の目がある種の呪力をもっていたことを物語っている。

別の例を『今昔物語集』から拾ってみよう。聖武天皇の御代、一人の美しい女が天皇に召され、一夜の寵愛を受けた。天皇は女がかわいいと思い、黄金一千両の入った銅の箱を与えた。天皇はやがて亡くなり、女もまもなく死んだ。女は、この箱といっしょに埋めてくれるようにと遺言して死んだので、いっしょに埋葬してやった。そのころ、石淵寺という寺にお参りする人は、そのまま死んで帰ってこないで、誰も参詣しなくなった。陰陽道に通じた吉備真備が真相をたしかめようとして寺にお参りすると、一人の美しい女が現れた。女は、参詣人にいいたいことがあるのでこの寺にくるのであるが、彼女の姿を見て恐れてみな死んでしまう。どうか自分のいうことを聞いて欲しいという。吉備の大臣が聞くと、彼女は天皇から頂いた黄金を墓に埋めた罪によって毒蛇となり、その黄金を守って墓に住み、そこから離れられない。そこで、黄金を取り出して法華経を書写してこの苦しみを救ってくれという。大臣は女に教えられた場所を掘ると、土の下に大蛇が銅の箱に巻きついていて、大蛇が立ち去ったので、箱を開いて見ると、中に黄金千両が入っていた。大臣はこの金で法華経を書写し、盛大な法会を催してやった。その後、女の霊が大臣の夢に現れ、礼を述べて空に飛び去って行った（巻第14、第4）。ここでは、蛇の化した美女を見た人はその目の力のために死んでいる。日本でも、世界の多くの国々と同じように、蛇に遭ったら、蛇と目を合わせないで速やかに立ち去れといわれている。この話では、女は死後、蛇になり黄金を守った。彼女は黄金に執着したために蛇身を受けたということになっているが、これは仏教説話として修正されたのであろう。人が死ねば蛇になるという信念は、古くから日本にはあったようである。

スウェーデンの地質学者であり考古学者でもあった J. G. アンデルソンは、その著『黄土地帯』（松崎寿和訳、学生社）の中で、中国の新石器時代の文様の中の一つである連続三角文様を喪紋としたが、この文様は文字どおり葬関係のものに見られる。このような文様は日本の古墳にも見られる。茨城県の虎塚古墳には連続三角文と、二つの三角形が向かい合った向かいウロコ文が見られる。このような文様は、志田諄一教授によると蛇の変形で魔除けの記号であるという（『古代日本精神文化のルーツ』毎日新聞、岡本健一、日曜くらぶ17、平成元年1月15日）。このような連続三角文や鋸歯文は、正倉院の羊木藤額屏風の羊の胴や首にも見られる。構図的には、生命の木の下に羊を配したものである。羊は再生を目的としたものであったに違いない。おそらく、この絵のモチー

フのもとの意味は、この羊がまます繁殖して、人間に十分な食糧をもたらしてくれるようにというものであったと考えられる。

蛇のウロコは四角あるいは菱形にみえる。しかし、光の具合で、ウロコの列は連続三角形に見えるのである。三角形がウロコ、ことに蛇のウロコであるという伝説は、およそ二十種類ある日本のウロコの家紋に見ることができる。鱗紋の中では北条氏の三つ鱗がもっとも著名である。北条時政が、江ノ島の弁才天に参籠して子孫の繁栄を祈った。満願の夜、一人の女性が現れ時政の前に伏したかと思うと、三十丈ばかりの大蛇となり、海中へと姿を消した。その跡に大きな鱗が三枚残っていた。時政は、この三枚の鱗を旗印にした、という話が『太平記』巻第5にある。連続三角文は今のトルコの大部分を占めるカッパドキアの古代遺跡やサハラ砂漠の遺跡などにも見られる（能坂利雄編『日本家紋大鑑』新人物往来社、昭和54年、131-2頁）。三角文は、蛇のウロコ、あるいは蛇そのものを代表したのであろう。しかも、その蛇もこの世的なものというよりは、あの世的なものであることがうかがえる。『太平記』の記述によると、蛇と人間である女性は同一のものであった。しかも、その女性は夢に現れるあの世的存在である。

死者が蛇になるという信仰は、世界的に広く分布する。土葬した際にできる土中の空隙が、蛇にとっては最適の住居となるので、死者は蛇になると信じられたのであろう。ギリシア神話では、テバイの建設者カドモスは、その妻ハルモニアと共に蛇に変えられて極楽の地に送られた。カドモスの神話には、彼がもともと蛇であったことを示唆する話がいくつかある。彼はテバイを建設するのであるが、神託に従って、雌牛の後について行き、その牛が休んだ所に城を築いた。そして雌牛をアテナ女神に犠牲とした。この神話の中に、蛇が這った跡に目印をして築城するという伝承が隠されているように見える。干宝『搜神記』（竹田晃訳、平凡社、昭和39年）巻14に、城を築いた蛇の話があるが、それによると、ある女が野原で巨大な卵を見つけ、持って帰ると人間の赤ん坊が生まれた。この子の四歳のとき、城を築く名人の募集があったので、蛇に姿を変え、自分ののはったあとに灰で印をつけさせ、その線どおりに城を築かせるとすぐにでき上がった、という。これは、蛇が大地の子として、建築の基礎に関係することを意味するが、このことについては後述したい。カドモスは建築用の水を従者に近くの水に汲みにやらせるが、水から竜が現れて従者たちを殺した。カドモスは水にかけつけて竜を殺し、その歯を地上にまくと武装した男たちが現れ、互いに殺し合いを始め、最後に五人が残り、彼らはのちにテバイの貴族の祖となった。この話の中には竜が出現してカドモスに殺されるが、竜を殺す者はのちに自分自身が竜として殺されるのである。カドモスはその近くに、のちのテバイの町を建設する。カドモスとその妻ハルモニアの間に生まれたセメレは、ディオニュソスの母となったが、ディオニュソスは、蛇に体を噛ませて狂った女マイナスに祭られ、彼女たち（マイナデス、メナド）は蛇を体に巻きつけ、恍惚状態になって野獣を八つ裂きにしておれを喰らった。カドモスの娘アガウエは、まかれた竜の歯から生長した男と結婚したが、彼女自身もマイナスであったが、八つ裂きにされて殺された。このように、カドモスの周辺は蛇で占められている。そこで、カドモスと妻ハルモニアが死後蛇になったという神話は理解できる。

三世紀のエジプト生まれのギリシア・ローマ哲学者プロティノスの臨終のとき、一匹の蛇が死の床から這い出してきて、この哲学者が息を引き取った瞬間、壁の穴の中に消えていった（ディオゲネス・ラエルティウス『哲学者列伝』パリ、1878年の付編、ボルビュリオス「プロティノス伝」103頁）。この蛇は、死せるプロティノスの魂が乗り移った蛇、あるいは彼の<sup>へんげ</sup>変化であったことはいうまでもない。このように、墓や家に出没する蛇は、死者の靈魂の化身とされたのである。

スパルタ王クレオメネスがエジプトで殺されて隣にされたとき、彼の遺骸の番をしている人々は、大きな蛇が巻きついて、その顔を覆い隠し、食肉鳥が飛びつかないようにしているのを見た。人々は彼を神々の子と呼んでこの場所に参詣した。のちに、学識のある人々が、牛が腐ると蜜蜂が生じ、馬が腐ると黄蜂が生ずるが、人間の体も、骨髓にある白い血が固まって蛇を生ずると述べて蒙を啓いた（プルターク『英雄伝』「クレオメネス」39）。人間の頭部のところに、魂の化身あるいは祖先靈の化身としての蛇がまといつくモチーフについては後述したい。南方熊楠「十二支考」（『南方熊楠全集』第1巻、平凡社）に、オウィディウスの『変身譚』を引いて、人の脊髄が蛇になるといっている（209頁）。奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳の石棺を開いたとき、被葬者の脊椎骨が散乱することなく出てきた。墓中の脊椎骨を見た古代人は、蛇との類似に思い至ったであろう。

ローマ建国の礎を築いたトロヤの英雄アエネアスが、父の死後一年祭のとき、シシリーの墓所を訪れると、大蛇が現れて墓を七重に巻き、虹のように<sup>ちいろ</sup>干色に輝いて、酒杯や鉢の間を迂りゆき、供えの食事に口をつけ、再び墓の下に入っていった。アエネアスは大蛇はこの守護神か、父の使いのものか分からぬながら、羊、豚、牛それぞれ二匹を供犠し、大地におみきをまいて死者たちの霊を祭った（ウェルギリウス『アエネイス』5・80以下、泉井久之助訳、筑摩書房、昭和40年）。この大蛇は守護神であると同時に、父の化身であったのかも知れないのである。ウェルギリウスは、アエネアスの父の化身とは考えたくなかったのであろう。あるいは、ウェルギリウスの世界観には、もう蛇は死者の化身であるという観念はなかったのかも知れない。そこで蛇を父の使者としたかったのであろう。あるいはその土地の精つまり守護神そのものという観念だけであったかも知れない。十九世紀のエジプトには、古代エジプト人の迷信の名残が見られた。すなわち、カイロの各街区には、蛇の形をした風変わりな守護神である<sup>ゲニウス・ロキ</sup>善神<sup>アガト・ダイモン</sup>が住んでいるといわれていた（W. レイン著、大場正史訳『エジプト風俗誌』桃源社、昭和52年、182頁。原書初版は1836年、1987年復刊）。イスラム教であるので、守護神は観念上のもので、偶像ではないのはもちろんである。蛇とジンと呼ばれる魔神や妖精との関係はイスラムの民俗に見られる。オーストリア生まれのユダヤ人、レオポルド・ワイスはイスラム教に改宗してメッカに巡礼するが、途中、陽の沈むころ、子供の腕ほどの太さの、1ヤードもある大きな蛇が道を横切り、かま首をもたげた。彼は鞍からすべり降り、カービン銃で蛇を撃ち殺した。アラビア人の従者は、ジンは夕方になると地下から出て蛇に化けることがある、といって怖れた（ムハンマド・アサド著、アサド・クルバンアリー訳『メッカへの道』原書房、1983年、189頁）。ゲルマン人の間でも、蛇は人間の死と共に現れる。いくつかの地域では、家ごとに雄雌二匹の蛇がいるが、その家の主人または主婦が死なないうちは姿を現さない。そして、

これらの蛇もやがて同じ運命をたどるのである(J. グリム『ドイツ神話』第2巻, ベルリン, 1876年)。この蛇も、主人あるいは主婦の化身であると考えられる。それは祖霊でもあるし、守護霊でもあった。

文武天皇の御代、膳臣<sup>かしわでのおみ</sup>広国は急死したが、三日目に生き返って黄泉の国に行き、死んだ妻が刑罰を受けているのを見た。さらに死んだ父とも会ったが、毎日、ひどい苦しみを受けていた。父は広国に、自分は飢えて7月7日に大蛇になって生前の家に行き、戸口から入ろうとしたが、広国が杖でひっかけて捨てた、と嘆いた(『日本霊異記』上巻, 第30, 『今昔物語集』巻第20, 第16)。このほか、広国の父は5月5日には赤い小犬になって家に行くが、他の犬に喰いつかれ、打たれて追い払われている。正月1日には猫になって家に入り、お供えの飯や肉を食べて三年分を喰いつないだ、とある。死者は蛇に化身するばかりでなく、犬や猫にも、さらには前掲書の仏教説話でしばしば見られるように、牛や馬にも転生した。

アフリカには死者の魂が蛇に化生する伝統が続いている。J. G. フレイザー『金枝篇』第5部『穀物と野獣の靈魂』第2巻, ロンドン, 1912年によると、マダガスカル島の諸部族の間では、死者は生前の身分に従って、蛇、ワニ、ウナギなどに化身するという。例えば、貴人の遺体を家屋の大黒柱に縛りつけ、腐敗した人体部分を銀の容器に移す。汚液の中で成長したウジ虫の中で最大のものに貴人の魂が宿ると考えられており、それはやがて大蛇(ボア)に変化する。そこで、彼らは誰もボアを殺さないし、ボアが彼らの村を訪れると、跪いて迎える。いっぽう、平民はワニになり、下層民はウナギになる(289-90頁)。マダガスカル人の間には、魂の輪廻のモチーフは失われているが、アフリカ、ことにエジプトではそれがあった。ヘロドトス『歴史』が伝えるように、人間の魂は不滅で、肉体が滅びたあと、陸・海・空に棲むあらゆる動物の体を一巡し、三千年かかって、新しく生まれる人間の体に入る(2・123)。東アフリカのマサイ族の蛇族の人たちは蛇を殺すことがない。彼らは死後、蛇になると信じているからである。蛇と人間との関係は極めて密接で、アダムの子となったエヴァの名は、蛇と同じ語で人間は蛇の子孫であるという信仰がヘブライ人や他のセム人の間で保持されたのであろう、という十九世紀から二十世紀にかけてのドイツの東洋学者 T. ネルデーケの説は傾聴に値する(ヘースティングズ『宗教・倫理百科辞典』第11巻, 411頁)。エヴァとはセム語で「生命ある者」の意で、蛇をあらわす。

南アフリカのバントゥ系部族の間でも、死者は蛇になり、蛇の姿で旧居を訪れるという信仰がある。アフリカから遠く離れたマレー諸島のボルネオ島では、イバン(海)・ダヤク族の間に死者が蛇になるという信仰がある。蛇は守護霊であるので、家の中に入ってきて、彼らはこれを殺すことがない(フレイザー『金枝篇』第4部『アドニス・アッティス・オシリス』第1巻, ロンドン, 1914年, 82-4頁)。蛇は祖先霊であつたので供物を供えられた。供物には蜜菓子や山羊や牛の乳があつた。蛇の魂は、その家の女性の胎内に入って再び人間として生まれるので、そのために乳を供えたのであろう。乳は蛇の好物であるかも知れないが、乳の供物は蛇信仰と牧畜文化のある所では共通して見られる。

日本の野辺送りで、たつがしらを葬列の先頭に立てて進む民俗がある。たつがしらとは、竹で編んだ球状のもので、いわゆる魂袋の一種である。死者の魂は、野辺送りのときにはすでに肉体には留まっていず、やや遊離した場所に位置すると考えられている。その魂をたつがしらの中に固定するのである。葬列を竜（蛇）と見立てれば、死者は竜蛇となって死後の世界に赴くことになる。説話に見られるように、死後は蛇になって旧居を訪れるのである。朝鮮の場合、新羅の文武王は倭兵を鎮圧しようとして慶州に感恩寺を創建しようとした。しかし、竣工しないうちに崩じた。王は海竜となったが、その子、神文が即位して寺を竣工した（『三国遺事』巻2）。文武王は東の海の大王岩の海底にある王陵に葬られている。感恩寺は、現在は二基の石塔が残っている。金堂跡の基壇の下は暗梁になっていて、東海海底王陵と通じるとされる。文武王は竜に化身し、国家の守護霊となったのである。中国の天子の礼服には、五本の爪のついた竜の刺繍がしてあるが、天子が最高のおめでたい竜そのものであると考えられるようになった前の段階では、竜は天子を守る祖先霊であった可能性がある。守護霊としての竜が、それを常に身につけていた天子そのものと見なされるようになったのである。

垂仁天皇がサホ姫を皇后にしたとき、サホ姫の兄のサホ彦が妹に向かって、夫と兄とはどちらが大切かと尋ねた。皇后は兄が大切だと答えた。そこでサホ彦は妹に紐のついた小刀を与えて、天皇を刺すように命じた。皇后は小刀で天皇の首を刺そうとしたが刺すことができず、涙が天皇の顔の上に落ちて流れた。天皇は目をさまし、皇后にサホの方から俄雨が降ってきて、顔をぬらし、蛇が首にまといつた夢を見たと話した。皇后は隠しおおせないを見て、一部始終を話した。そこで天皇は、軍をおこしてサホ彦を討った（『古事記』）。ここで、天皇の首にまといつた蛇は、天皇の守護霊で、天皇を危険から救ったのだと考えられる。守護霊である蛇は、天皇家の祖霊神であった。天照大神の神話には、蛇に関するものはないが、イザナギ・イザナミ両神の天地創造の神話には、蛇神と思われるものが現れる。『日本書紀』によると、両神は海・川・山を生んだあと木の精であるククノチを生み、次に草の精であるカヤノ姫または野槌<sup>のつち</sup>を生んだ。『古事記』では、風の神、木の神、山の神、野の神を生んだとあり、野の神の名はカヤノヒメノ神または野槌神であるとする。ノツチというのは「野の精」のことで蛇を指す。野槌神は皇室の祖霊ではないが、このあと両神は、『日本書紀』本文では、アマテラス・ツクヨミ・スサノオ三神を生む。野槌を生む直前に、両神は木の精ククノチを生むが、ククノチというのも、クク（木木の古形、岩波、日本古典文学大系『日本書紀』上、86頁、頭注）ノチで、木の精のことである。木の精は「こだま」のことではなく、やはり蛇を指したと考えられる。カヤノ姫は女性の蛇神であるが、ククノチは男性の蛇神であったと思われる。奈良県三輪山の神は蛇体をしていて、三輪山伝説の主人公となった。

日本の神社や仏寺の入口の門には、長さ数メートルにわたるワラでつくった綱が掛けてある。この綱は、正月飾りのしめなわを掛けるのと同じ場所に掛けるので、正月飾りの巨大化したものと思われがちである。しかし、この巨大な綱は蛇を表わしたものらしい。神事において蛇が綱の形をとって現れるのがしばしば見られるからである。また、日本の各地で神事として行なわれる綱引きで



は、両軍の綱は雄綱と雌綱とされ、中央の結び目は雄雌器を象徴するものを結合してつくられる。この二つの綱は蛇を表したもので、社前に安置するときには蛇のとぐろ状に巻いてある。この蛇は祖先霊で、雄雌二体から成っていた。それらが模倣的闘争をすることによって、死せる生命の再生を促進すると考えられた。大蛇は、豊饒の象徴として村中を担ぎまわった。『アニマ』平凡社、1988年12月号に、アマゾン川を遡ってきた長さ10メートルはある大蛇アナコンダを、五人がかりで土着民が川から担ぎ出す写真が掲載されている。現在では、蛇の皮は白人に高く売れる。頭部は乾燥するか炭化することによって商品になる。骨も相応の価値がある。内臓の一部はくすりになるであろう。肉は食物として彼らの胃袋に入ることになる。彼らが大蛇を解体する前に、大蛇を担いで集落の中を練り歩き、収穫を喜ぶ様子が目に浮かぶ。大蛇は祖霊が化身したもので、子孫である彼らに自らが食料としてやってくるのであろう。ちょうどアイヌのもとを訪れる鮭や熊がこれにあたると考えられる。アイヌの場合、これらのものは神からの贈り物であったり、神自身であったりする。前述したように、アイヌにとっては、蛇は何となく恐ろしいもので、祖霊神とは見なされていない。大蛇を担ぎまわった時代の名残は、日本の民俗のなかにもある。一例として、山陰地方の大山赤松の荒神祭の大蛇を挙げておこう。中村禎里『日本動物民俗誌』（海鳴社、1987年）は、白石昭臣『日本人と祖霊信仰』（雄山閣、1977年）にしたがって、それを記述している。四年に一度のこの荒神祭では、30メートルほどの大蛇が蒿でつくられ、その中ほどに男根の模型が挿入される。祭りの当日、蒿蛇を担いだ氏子達が部落中を練り歩き、最後には、氏神社境内の神木にこの蛇を巻きつける。この蒿蛇は、死霊を祖霊にまでとむらい上げる媒体の役割をはたし、同時に農作の成功が祈られる（127頁）。奈良県御所の町の南東部にある蛇穴まらぎという集落の鎮守である野口神社の神事について、小川光三「カミとホトケ」（『東アジアの古代文化』50号の記念特大号、大和書房、1987年）は次のようにいっている。野口神社では、5月5日に蛇綱引きがあつて、蒿で10メートル余りの蛇体をつくり、集落中を練り歩いてから、拝殿横の磐座に蛇体を巻きつかせて蛇穴をつくる。吉野裕子博士によると、古くは蛇を祖神とする歴史が世界の各地に定着していた。大和の三輪山の神は蛇体で、山を七巻きしていたが、古代の人は、蛇がとぐろを巻いた蛇穴から、祖霊神が出現すると考えていた（213-4頁）。蛇のとぐろの内側から祖霊神が出るというのは、螺旋あるいはラビリントス（迷宮）からの再生を意味する。迷路図はゴシックの大聖堂—例えばパリ郊外のシャルトルのそれ—の床には、かつては現在よりはより多く見られた。このような螺旋形迷路は、人工のものには必ずどこかに通過不可能の箇所が設けられてある。この場所以外の箇所を通して迷路を抜け出るのである。迷路は、教会の床上にあるが、そこはこの世とあの世の境界で、キリスト教以前は祖霊が去来する場所であったと考えられる。キリスト教には異教時代の迷路が残存し、文様あるいは装飾として残ったのであろう。迷路図の起源は蛇のとぐろであったのかも知れない。蛇の脱皮が意味する再生は、とぐろに祖霊を再生させる力があることと関係があつた。蛇のもつ毒や噛みつきは、迷路を通過する難関とされたのであろう。迷路は大地の腸を象徴したものと、産道を象徴したものととも考えられる女性原理のものであつた。蒿蛇の中ほどに男根を差し込んだり、蛇穴から誕生するのはこのた

めである。

蛇が死者あるいは祖霊の化身として崇められた例をあげておこう。西アフリカのセネガル、ガンビア地方では、大蛇部族の人に子供が誕生すると、八日以内に大蛇がその子を訪ねて来ると考えられていた。また、プリニウス『博物誌』(7.14)によると、古代アフリカの蛇族であったプシュリ人は、新生児を蛇の前に置いた。こうしても、蛇は蛇族生まれの子供には危害を及ぼさないと彼らは信じていた(フレイザー『金枝篇』第5部『穀物と野獣の霊魂』第2巻, 174頁)。新生児には死者の霊が入るという信仰は世界的に見られる信仰である。死者が蛇に化身すれば、その魂は新生児には入らないのが道理である。新生児を訪ねて来る蛇は、子供の中に入った魂ではなく、魂を送り込んだトーテムの世界の代表なのだろう。同じ西アフリカの習俗でも、全く反対の場合がある。フレイザー、前掲書にあげる例によると、フェルナンド・ポ島のイッサブー黒人の間では、毎年コブラ(を殺して)の皮を広場の樹に掛ける祭りがある。祭りが終わると、昨年生まれた子供たちがみな連れてこられ、蛇の皮の尾の部分にさわらせられる(同頁)。尾には魂が宿るという考えが多く、この文化に見られるので、これもその一つであろう。この祭りは、この世を訪ねて来るトーテムを殺し、その霊力をもらう新年祭であると考えられる。そこで、旧年に生まれた子供は、この蛇から魂をもらったのである。この蛇は、トーテムの代表で、一匹ですべての子供に生命力を授けた。

蛇は祖先霊の化身であるが、しばしば生命樹と呼ばれる木といっしょになって現れる。一本の枝に二匹の蛇が巻きついた、ギリシア神話のヘルメス神の象徴であるカドゥケウスもその一つである。この枝は、ヘルメス神がそれを代表するように、商業のシンボルでもあったし、生命の再生という観点からすれば医術のシンボルでもあった。この二つの象徴は現在に至るまで用いられている。中国でも蛇と木が共になって現れた。干宝『搜神記』(竹田 晃訳, 平凡社)によると、ある女性が十歳のとき病気にかかったが、五十すぎてもいっこうに治らなかった。そこで占いの大家に調べてもらったところ、昔、先人が木を切って霊蛇を殺したからだということであった。そこで調べてみると、先代が大木を切ったところ、大蛇が出てきたので殺した。するとその女性が病気になったのであった(巻3)。大木の中、あるいは根元に巣食う蛇は、娘とつながるトーテムの代表であったので、この蛇を殺した結果、娘から生気が去ったのである。中央アジアを旅したドイツの東洋学者ル・コックは、出土した棺の蓋に、竜の頭を前に、尾を後ろにした彫刻が施してあるのを見て、同じものがフランク王国のカロリング朝の棺にも見られるという旨を述べていた(木下龍也訳『中央アジア秘宝発掘記』角川文庫, 昭和37年, 172頁)。棺は元来、樹木の幹を二つに割り、中身を割りぬいたものであったので、それに竜(蛇)が彫ってあるのは、聖樹と蛇の組み合わせの一つの表われである。

昔、西の京に身分賤しからぬ人がいた。その人に一人の女の子がいた。この子が娘になったとき、彼女は紅梅だけを深く愛するようになった。そのうち、娘は何となく気分がすぐれず、病床につくようになり、とうとう死んでしまった。この木の下に毎年蛇が現れて木に巻きつき、花が散ると花びらを口でくわえて一所に集めた。父母はこれを見て、この蛇は娘の生まれ変わりであることを知

り、講師を呼んで法華経を講じてもらった。娘はお陰で蛇身を脱して天上に去っていった（『今昔物語集』巻第13、第43）。ここでは、紅梅の樹が生命樹にあたる。この樹と小蛇がひと組みの単位になっているが、その前に娘の死が前提となっていた。娘の魂が蛇に化身したことは間違いない。仏教説話であるので、蛇身を忌むべきものとし、法華経を講ずることによって、娘が蛇身を脱するようにしたのである。しかし、人間は死後、蛇になるという観念が薄くなり、畜生となるという応報的な考えが強くなったようである。前述した膳臣<sup>かしわでのおみ</sup>広国の話では、広国の父は7月7日には蛇になってもとの家に帰って来た。5月5日には赤い小犬になり、正月には猫になって家に帰っている。節目々々に、死んだ父がさまざまな動物になって、生前の家に帰っている。各家の死者も、おそらく、このような節目に家に帰ると考えられる。小正月にあの世へ帰る、あるいはあの世からやって来る蛇について面白い報告がある。宮田 昇『終末観の民俗学』（弘文堂、昭和62年）によると、千葉縣市川市の1月17日の「辻切り」では、境にあたる四つ辻の木の上に、蒿でつくった大蛇を、頭を外に向けて掛ける。この儀礼によって、外部から襲ってくる邪悪な霊は、境界の辻によって一切排除されることになる（萩原法子のレポートによる）。この蛇も、節目に去来する祖霊の化身であるに違いない。ここでは、蛇＝祖霊は境の神として通路をふさぎ、守護神として機能していて、両界を去来する機能を失っているようである。辻切り、道切りの蛇は、神社・仏閣の入口に張ってある巨大な、くねったしめ縄が元来は蛇であったことを再確認させる。古くは、バビロンの門の敷居の所にネブカドネザル二世は青銅の雄牛と直立した蛇の像を立てた（H. C. トランブル『敷居上での契約』エジンバラ、1896年、109、234頁）。トランブルは、M. コックルの教示によるとして、ヘブライ語ミフターン（敷居）はベセン（蛇）に関係があるかも知れないといっている。Miptānのphtānはpethenと同語と考えられるからである。つまり、「蛇のいる所」というのが敷居の語の起こりとするのである（前掲書、233頁）。

蛇と聖樹の関係も古代西アジアに見られる。バビロニアに見られる男根形あるいは柱形の境界石（日本でいえば、四つ辻の塞の神である道祖神にその面影が見られる）には、蛇が巻きついているが、市川市の辻切りの蛇と同じように、境界の守護神の役割を果たしている。ラムセス四世（前12世紀）時代の、テーバイのインヘルハの墓の壁には、猫が手に刀をもって、生命樹の根元にいる大蛇を殺す絵が描かれている（J. B. プリチャド『絵で見る古代近東』第2版、プリンストン、1969年、669図）。あとで考察したいが、墓の中で、祖霊の化身である蛇を殺すのは、殺された蛇の魂が、死者を再生させると考えられていたからである。猫は、古代エジプトでは神聖視されたので、猫が蛇を殺すのはそれなりの意味があったに違いない。

『旧約聖書』の伝承では、エデンの園の中心に生命の木があり、傍に善悪を知る木があった。蛇に誘惑されて、禁断の木の実を食べたため、アダムとエヴァは楽園を追放された。メソポタミアの『ギルガメシュ叙事詩』（矢島文夫訳、三笠宮崇仁・杉 勇編『古代オリエント集』筑摩書房、昭和53年）では、ギルガメシュは不死の国を訪ね、ウトナピシュティムに、老人を若くする草シーブ・イッサヒル・アメルを海底に潜って取った。しかし、帰途、泉に入って水浴びしている間に、

蛇にその草を食べられてしまった。そのために、ギルガメシュ（人間）は不死を手に入れることができなかった（166頁）。

M. エリアーデ著、掘 一郎訳『大地・農耕・女性』（未来社、1966年）にいう。生命の木の守護神である蛇は、不死の果実を守っているが、これを手に入れたいなら、蛇を殺さなければならぬ（156頁）。この果実は、不死の果実であったが、傍には別に死を象徴する木もあり、それにはエヴァが食べた死の果実が生っていた。黄金や宝を守る蛇は、生命の木を伴わなくても、祖霊の化身で、生命力の象徴であるので、同じ蛇と考えられる。生命の木は本来、地下に生える木である。その木の根元に蛇がいるのであるが、いくつかの文化では、樹上にはワシがいて蛇をねらっていた（ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シャマニズム』三省堂、昭和46年、71-2頁）。蛇は何らかの理由で、つねに狙われ、殺される運命にあったといえる。

門と敷居の構造に戻ろう。古い門は、左右二本の柱から成っていた。二本の柱は元は樹で、雄と雌あるいは死と生を象徴したのであろう。バビロンの門の敷居には、雄牛と直立した蛇の像が彫ってあったことは前述した。雄牛とワシは、蛇を攻撃する同一原理ではなかろうか。蛇が、雉やトビに襲われたり、野猪にもあそばれるという報告を目にすることがあるが、雄牛は、現代の自動車が蛇を轢き殺すように、蛇の頭を踏みつぶしたのであろう。日本の鳥居は、その名称から察せられるように、柱の上部に鳥が止まっていたのであろう。鳥居の真下には、古くは祭壇に相当するものがあったことは別稿で論じたことがある。この祭壇は、一種の礎石でもあったが、礎石の下に蛇を封じ込める習慣は、例えばインドの場合は次のようである。礎石を置く場所は、天文学者が指示するが、その地点は、世界をになう蛇の上にある。石工は杭の先端を尖らせて、そこに打ち込むが、それは蛇の頭を固定するためという。つづいてその上に礎石が据えられる（M. エリアーデ『聖と俗』法政大学出版局、1969年、47頁）。現在は、建築に際しての定礎は、入口のまん中ではなく、左右いずれかの部分になっている。定礎式で礎石の下に蛇あるいはそれに相当するものを現在でも入れるのかどうか、つまびらかにしないが、古代の民俗誌には散見する。ギリシアのデルポイにあるアポロンの神託所には大蛇ピュトンが住んでいたが、アポロンに殺されて、そこにあるへそ石であるオンパロスの下に埋められる。このへそ石は、宇宙の中心あるいは神界から人界への出口と考えられた場所で、祭壇でもあり礎石でもあった。その上には、脚が三本ある椅子が置かれ、巫女がアポロンの神託を述べた。椅子の脚は三本の聖樹を象徴したのであろう。大蛇ピュトンが殺されて、ゼウスの子アポロンがそれに代わるのは、先代の王を殺し、新しい王が即位した時代の名残りであると考えられる。エジプトの墓壁に描かれた、生命の木のもとで猫が大蛇を斬るシーンも、死と再生を象徴するものである。ローマの例をあげておこう。古代ローマでは3月から新年が始まったが、年末である2月の23日に境界石祭テルミナリアという祭りが催され、各地の境界石テルミヌスが飾られた。ローマでも年末にはあの世から祖先が訪れて来ると考えられていたので、この世とあの世の境界の標識であるこれらの石を飾って祖先迎えをしたのであろう。祖霊は蛇になって訪れてきた。ウィルギリウス『祭事暦』の2月24日の項を見ると、この日、王は都の外に逃走した。27日ある2月の月末までの三日間は、

奴隷、捕虜あるいは死刑囚が仮の王として統治し、新年における王の帰還と共に、殺害された。この日、祭壇の石（境界石）を上げて見ると、下から蛇が現れた。そこでアポロンにお伺いを立てると、「最初に母に口づけした者が勝利者となろう」という神託があった。人々はいそいで自分の母親に口づけしたが、ブルーツスは大地に倒れるふりをして、大地の母神に口づけをした（『ロウプ古典文庫』J. G. フレイザー訳あり）。祭壇の下から出てきた蛇は、新年を前にして、この世の子孫に活力を与えるためにあの世から訪れてきた祖霊であった。あるいは、祖霊自身が新年の聖婚で女性の子宮に宿り、人間に化身することも考えられたであろう。蛇は地母神と深く結びついていたことが分かる。『旧約』の「創世記」のエヴァは、古代フェニキアの地下世界の女神であり、地中海域の、手に蛇をもった女神や、頭髮が蛇の形をした女神は、みな同じ地母神であると考えられる（木村重信『ヴィーナス以前』中公新書、140-2頁）。

祭壇、境界石は、この世とあの世の境界に位置する石であるが、それは両世界から見ると、へそに当たる中心と見なされた。王が即位する壇あるいは王座は、このような両界の中心に位置するが、古代西アジアの王座は、蛇や一定の動物を伴うという現象がしばしば認められる（藤井純夫「西アジアにおける王座の型式とその坐法について」『深井晋司博士追悼 シルクロード美術論集』吉川弘文館、昭和62年、7-8頁）。王座は一般に、百獣の王であるライオンを伴った獅子座を想起するが、より古くは、百獣の女王（ギリシア語ではポツニア・テローン）である地母神あるいはその象徴としての蛇を伴ったのではないかと思う。へそ石は、仏教では獅子座となって仏や高僧が座る。しかし、より古くは、へそ石には蛇の記憶があったと思われる。

日本にもその系統が見られる。修験道では、奈良県の吉野山の金峯山<sup>きんぷせん</sup>は一つの竜体であるという伝承がある。山上の蔵王堂<sup>ざおう</sup>の内々陣の須弥壇の下は、黒光りのした蛇の頭のような大岩が、不気味に地表に現れた地下室になっていて、竜の口と呼ばれるが、決して入ることは許されないという（久保田展弘『山岳霊場巡礼』新潮社、昭和60年、117-8頁）。須弥壇は、世界の中心の山である仏教の須弥山を表わす壇で、それはへそ石であり、祭壇でもあり、その上に仏像は立つ。神は岩から生まれ出る。ことにその岩はへそ石であり、境界石である。ここから神の子が生まれるのであるが、その下に蛇がいるのである。

蛇は誕生や出産と関係のある祖霊の化身であったので、産婦にとっての守護神ともなった。永尾龍造『支那民俗誌』第六巻によると、中国では、長さ三尺以上の完全な蛇のぬけがらをとってきて、腹巻きの中に入れ、婦人がつねに身にまとっていると子を得るといい、流産のくせのある女性は、流産を防ぐことができるといわれた。中国では、蛇が多淫で多子であるからだといい、蛇がものによくまとい付くから流産を防ぐと考えられていた（173頁）。中国では、蛇がもっていた意味は忘れられ、新しい解釈がつけられていたのが分かる。蛇は中国では難産のときの守護神でもあった。永尾龍造『支那の民俗』（磯部甲陽堂、昭和2年）によると、中国では、難産の場合、道士を呼んで祈ってもらった。道士は蛇形に彫った一尺くらいの棒で、産婦の寝床の周囲を打った。他の道士たちは、これに合わせて読経し、笛、太鼓、ドラなどではやし立てた（21-3頁）。この守護神は、産

婦が苦しんでいるところに、美しい女性として出現し、産婦の腹をさすってやった。すると産婦は数十匹の蛇の子を生んだという。この蛇神は、1月15日が誕生日であるので、元宵つまり15日の小正月は、参詣人が山をなすといわれる(18-9頁)。蛇の棒で産婦の周りを叩くのは、蛇の中の靈魂である祖霊を産婦に乗り移らせるためであったといえる。お産の神は蛇であるので、蛇の子が生まれることもあったのである。しかし、本来の意味は、もう忘れ去られていたであろう。蛇は、新年の再生が完了する小正月や、新年の直前である大晦日に出現する。このような蛇は、あの世からこの世を訪れて、また小正月にあの世に帰って行く祖霊と重なり合う。清朝末期の敦崇『燕京歳時記』(小野勝年訳、平凡社)によると、除夕(大晦日)に、大蛇の刺繍をした衣服を着て親戚友人を訪問するのを辞歳、つまり年送りの挨拶といった(241頁)。この習俗は、各人が大蛇、つまり祖霊の役を演じて、親戚友人を祝福して回った時代の名残りである。ローマの年末にも、蛇が出現したことは上述した通りである。いずれも、蛇を祖霊に置き換えることができる。上掲書によると、正月には、テンの毛皮を着た高官や、大蛇の模様を刺繍した官服を着た人々が道路を往き来した(3頁)。天子や皇太子は、大蛇より上位の竜を刺繍する。巳年でなくても、歳の市で大蛇の一筆書きが売られる。大蛇の絵は魔除けとされるが、古くは新年に旧居を訪ねてくる祖霊であった。

祖霊の化身としての蛇は、新年ばかりでなく、他の節目にもこの世を訪ねてきた。中川忠英著、孫伯醇・村松一弥訳『清俗紀聞』(平凡社)にいう。5月5日の端午の佳節には、婦人は絹糸で人形・虎・蜈蚣・蛇などの形をかんざしにこしらえて頭上に挿す。これを健符という(I, 36頁)。人形や虎形は祖霊を表わす仮面であったのが、いつしか、女性のかんざしに変わったものと思われる。蜈蚣も祖霊であったのだろう。蛇はむかでを大いに恐れるという伝承がある。蛇は祖霊の化身である。これらのものを女性がかんざしに付けて挿したのである。魔除けの護符という意味の健符と呼ばれているが、女性が祖先霊を身に帯びるのは、子孫を得んためであったに違いない。したがって、男性には健符は縁がなかったといえよう。

釈迦の誕生も竜蛇と深い関係をもつ。4月8日は釈迦誕生日であるが、寺々では九条竜亭を堂中に設け、竜亭の内部に盆をすえ、白檀で刻んだ釈迦の立像を置き、九つの竜頭の口から香水を吐き出し、仏体にそそぐ(前掲書、33頁)。釈迦の誕生では、九匹の竜が出現する。前掲書、図版I-19(15頁)に九条竜亭の図があるが、亭の九本の柱に蛇が巻きついている。亭の中央にある水を張った盆はへそ石を表わす。そこに釈迦像が立つ。盆は女性原理を表象するのであろう。九匹の蛇は、無数の蛇を指すのであろう。これら無数の蛇の念力によって、この世に出生する神の子を表わしたものと考えられる。トランブル、前掲書、258頁に、南インドのパンガロール周辺での観察報告があるが、それによると、聖なるイチジクの木の下にいくつかの石が立ててあり、石には蛇が彫ってあった。イチジクは女性原理であり、それを蛇が囲んだ格好になっている。アダムとエヴァの話では、エヴァは蛇に唆されて裸体を恥じるようになり、二人はイチジクの葉で身体を隠したとある。生命の木がイチジクであるのは、イチジクの果実が乾燥果実として保存され(日本のイチジクとは種類が違う)、主食の地位を長い間占めていたからだと思う。釈迦像にはイチジクのモチーフはな

いが、蛇に囲まれた生命の水の真中に立つ生命の木であることは明らかである。水を張った盆の上に立つ立像は、インド古来のヨニ（女陰）の上に直立するリンガ（男根）を表象する。インドの場合は、左右に二匹の蛇や二本の聖樹が立つ。蛇と木の一方は生、他方は死を表わしたのであろう。その間から生命が誕生するという仕組みになっていた。中国の九条竜亭の構造は、インド古来の聖樹・蛇・女陰・男根の複合と同じ構造であるということができる。

デルポイの祭壇の下に大蛇がいたことは前述したが、ヘロドトス『歴史』によると、ギリシア人たちは、ペルシア人からの分捕品の十分の一の額で黄金製のかなえをつくった。このかなえは、青銅製の三つ頭の蛇の上にすえてあり、祭壇の近くに置いてあった（9・81）。かなえは祭器で、その中に酒を入れたり、いけにえの血や肉を入れたが、それによって、アポロン神の顕現を祈願したものであった。傍にはデルポイの巫女が、蛇に咬まれて半狂乱になり、神託を口走っていたと考えられる。ヘロドトスは、同じ条で、ことばをつづけて、ギリシア人はさらに、オリンピュアの神には10ペキュス（約9メートル）の高さの青銅のゼウス像をつくって献納したと述べている。この記事から類推すると、デルポイにも、ゼウスの子であるアポロンの、相応の高さの青銅像があったと考えることができる。幼児アポロンの誕生と、釈迦誕生は、同じような環境で起こったことになる。

このように、神の子が誕生する儀礼では、巫女が参加し、彼女らは蛇にわが身を咬ませて半狂乱の状態になったと思われる。女性を狂乱に導くのは、それによって神の声を聞くためであったと思われる。堀 眺「イラン及びアフガニスタン出土の分銅について」によると、蛇をもつ神としては、クノッソスの神殿から出土したファイアンス（彩色陶器）の女神が有名であり、豊饒の女神と一般に考えられている。この種の女神は北アフガニスタンでも出土しているが、それはスタンプ印章に描かれた蛇をもつ有翼女神である（前掲、『シルクロード美術論集』57-8頁）。西アジアの大地母神であるアシュタルテ・イナンナ・イシュタルはみな手に蛇をもつ姿で表わされている。これらの女神と蛇は、冥界とこの世の境界である門の所で、生命の水を死者にそそぐ。鴨居には、いわゆる有翼円盤が見られた。この円盤は、日本の正月の戸口のしめ飾りと同類のもので、この世とあの世の境界に現れる祖霊あるいは神の像であると思われる。敷居の下では、本物の蛇が祖霊の化身として陣取っている。

古代エジプトでは、アケナトン王とネフェルティティ妃の冠帽の額の部分に蛇が頭をもたげている。いっぽう、二人の頭上にある太陽円盤から十数本の光線が発射して、二人を照射している。この円盤の下にも蛇が付いているのが見える。日光を出す太陽はその照射の方向が一方だけであるが、その位置が他の有翼円盤の位置と同じであることが注目される。ツタンカーメン王の冠にも蛇と太陽円盤のモチーフが見られる（プリチャド、前掲書、133頁以下）。